

2006年7月2日 聖霊降臨節第5主日礼拝

『主イエスの名のためならば』

(イザヤ20章1～6、使徒言行録21章1～16)

エフェソの長老たちに別れを告げたパウロは、港から船に乗り込みました。いよいよエルサレムに向かうためです。船を乗り継いで、ようやくティルスにたどり着きました。ここからエルサレムまでは、もう200キロとない所です。船の関係で、このティルスに七日間滞在することになりました。そこでパウロたち一行は、神様から与えられた七日を大切にしようと、この町のクリスチャンたちを探し出しました。この町にも、大勢のクリスチャンがいたのです。すると「彼らは霊に動かされて、エルサレムへ行かないようにと、パウロに繰り返して言」いました(4節)。しかしパウロは、それには聞き従わずに、エルサレムへの旅を続けます。

それから今度は、カイサリアという町にやってきました。ここからエルサレムまでは、目と鼻の先、50キロもありません。この町にパウロたちがやってきた時の事です。アガボという預言者がユダヤから下ってきて、パウロに言いました。「聖霊がこうお告げになっている。『エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す。』」(11節)

これを聞いていた人々は、土地の人と一緒にあって、エルサレムへは上らないようにと、パウロにしきりに頼みました。それでもやはりパウロは、決心を変えようとはしませんでした。パウロはこう答えています。13節:「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」「パウロがわたしたちの勧めを聞き入れようとしないので、わたしたちは、「主の御心が行なわれますように」と言って、口をつぐんだ(黙るほかなかった。)」(14節)

聖書が記しているこの様子は、一見すると、矛盾しているようにも映ります。というのも、最初4節では”霊”に動かされた人々がエルサレムに行かないようにと説得しているからです。けれども、よく聖書を読んでもと、最初の説得(ティルスでの出来事)も、後に出てくるカイサリアでの説得も、実は同じだったことがわかります。最初の説得も後の方も、聖霊にうながされて預言されたのは、エルサレムに行くといかにひどい目に遭う、というものでした。エルサレムに行けとも行くなとも、預言者は一切語ってはいません。おそらく最初の預言も、エルサレムでパウロを待ち受けている運命について、聖霊が教えてくださったのでしょう。大変なことが待っていると。それを聞いて、それなら行かないほうがよいと、弟子たちが判断したのでしょう。

このようにパウロは、エルサレムを目の前にして、二度にわたって引き止められました。いずれの場合も、パウロのことを心から案じて、心配してくれた人々です。けれどもパウロは、決心を変えることはありませんでした。パウロの身を案じる兄弟たちが、これほど

頼んでいるのに、どうして？ なぜなら、パウロはそこに、「主の御心」を見て取っていたからです。

このエピソードから先の使徒言行録の終りまでを、ある人がこう呼びました。これは、パウロの受難物語であると。たしかに今日の物語を見ると、自然にわたしたちの胸に呼び起こされるものがあります。主イエスの十字架です。かつて主イエスも、ご自分の受難を目の前にして、弟子たちに引き留められたことがありました。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている」(ルカ9章22)。「すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。『主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。』」すると主イエスは、振り向いてペトロにこうおっしゃいました。「サタン、引き下がれ、あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」(マタイ16章22~23)

何と厳しい物言いでしょうか？ 主イエスの身を案じて、ペトロは言ったはずなのに。けれども主は、ペトロの心の中を、ちゃんと見通しておられました。ペトロがいさめたのは、ただ主イエスのことが心配だったからではありません。弟子であるべきペトロが、救い主であるイエスを「わきへ退かせて」、自分を前に出している。神の意志よりも、自分の思いを優先させている。自分の思いを神の子であるイエスに押しつけている。それは神の御心にかなわない、というだけではありません。神様よりも自分を上に置くという、恐ろしい罪になります。何よりも、人類を救おうとされる神のご計画に刃向かう罪を犯すことになります。そのためでした。主イエスがペトロをお叱りになったのは、こうして主イエスは、父なる神に与えられた十字架の道を、ただひたすらに、黙々と歩いていかれました。弟子のペトロが犯した罪をも我が身に背負って、十字架でその償いを果たしてくださったのです。主イエスの十字架のお陰で、わたしたちの今があります。そしてわたしたちに、輝かしい未来が開かれました。

パウロは今、あのときの主イエスのお姿を思い起していたのかもしれませんが。主イエスもまた、ユダヤ人に捕らえられ縛り上げられて、異邦人(ローマ人)の手に引き渡されました。わたしたちの主が、そこまでして、わたしたちを罪から解放してくださったのだから、罪人のわたしを苦難が待ち受けているとしても、何の不思議があるだろうか。わたしも、主と共に行く。主が十字架にかかれたエルサレムの都で、自分に与えられた十字架をわたしも背負おう。そうした覚悟が、パウロを決心させたのでしょ。その思いを、パウロはこう述べています。「主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです」(13節)

預言者の口から語られたのは、エルサレムに行くことと帯で縛り上げられ異邦人の手に引き渡される、ことだけでした。しかしパウロは、この預言から、捕らえられ裁判にかけられるだけではなく、命をささげることになるかもしれない、ということを感じとっていたようです。たとえそのようになったとしても、神様から与えられた道のりを、わたしは最後まで歩み通したい。なぜならそこに、主イエスがおられるから。そう言っているように聞

こえてなりません。

このようにしてパウロは、最後まで神の御心だけを信じ、御心を最優先にして、信仰の道を歩み通しました。このあと使徒言行録を見ると、あの預言の通りに事は運んでいきます。

どんなときにも、神の御心を追い求め、御心を優先したパウロ。見ようによっては、とても頑固です。皆がこれだけ心配し引き留めているのに、頑として受け付けない。まるで岩のように固く、何と冷たい人かと思います。でも今朝の聖書を見ると、決してそうではありませんでした。パウロという信仰者は、むしろ、神と人の間で人一倍苦しんだ人ではなかったかと思います。というのも 13 節にこう書いてあるからです。「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか」。

「パウロさん、行かないでください」、「もっとわたしたちと一緒にいてください」、「そしてこれからも、わたしたちを導いてください」。涙を流して、そう願う人々を前に、さすがのパウロも、心がくじけそうになったのです。パウロは決して、ただの頑固者でも冷血漢でもなく、ましてや英雄ではありませんでした。別れに際して、寂しさや悲しみや痛みを覚える、わたしたちと何ら変ることのない生身の人間でした。普段、あまり表に出すことはなかったかもしれませんが、熱い血が流れていた人、それがパウロでした。

自分が去ることで、残された兄弟姉妹が、きちんと信仰生活を送っていけるだろうか。自分がいなくなった後に、狼がやってきたら、愛する者たちが食いものにされたら。そう考えたら、パウロはいても立ってもいられなかったに違いありません。だからこそパウロは、20 章 28 節で、教会の長老達にこう言い残しました。「どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです」。そして最後に、パウロはこう言い送ります。「そして今、神とをの恵みの言葉とにあなたがたを委ねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです (20 章 32)」。この一言こそ、パウロの祈りであり、確信でした。

こうしてパウロと彼を愛する信仰者たちは、別れを告げました。まるで生木を裂かれるような思いで、パウロも、パウロを慕う人たちも、別れを惜しみました。ある人々にとつては、文字通り、地上における最後の別れともなりました。痛みを伴う別れでした。

けれども、パウロには確信がありました。人の思いは様々あっても、神の御心は必ずある。だから神に従おう。どんなに辛く、悲しくとも、「主イエスの名のためならば」、それを引き受けよう。そこにも、神の御心があるかもしれないのだから。そして御心のあるところにこそ、わたしたちクリスチャンの本当に生きる道があるのだから。パウロは、最後までそう信じて疑いませんでした。これこそが、生涯をかけてパウロが示し続けてきたこと、最後の最後まで伝えようとしている、パウロの牧会でした。

最後に、14 節をみてください。「パウロがわたしたちの勧めを聞き入れようとしないので、

わたしたちは、『主の御心が行なわれますように』と言って、口をつぐんだ。『主の御心』を受け入れたのは、実はパウロ一人ではなかったのです。そこに居合わせた兄弟姉妹みんなが、最後には、「主の御心」を悟り、これを受け入れる者となりました。聖霊による預言を聞いて、最初は浮き足立ち、何とかパウロを引き留めようとした弟子たち。しかし、葛藤と祈りの中で、ようやく「主の御心」が見えてきました。パウロにとっても、彼を愛する人々にとっても、主の御心が大きく、そしてはっきりと見えるようになりました。そうして最後には、「主の御心が行なわれますように」と言って、神の御前で皆の心が一つにされました。

「主の御心が行なわれますように」。これは、主の祈りです。同時に、十字架にかかる前、ゲッセマネで主イエスが祈られた祈りがこれです。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行なってください。」  
(ルカ 22 章 42)

牧者も信徒も、教会中が皆、この祈りへと導かれていくなれば、伝道と牧会は十分その目的を果たせたといえるでしょう。「主の御心ならば」。「主イエスの名のためならば」。この祈りによってこそ、わたしたちの信仰は深められていきます。教会の成長と、わたしたちの勝利は、この信仰にかかっているのです。

「主よ、あなたの御心のままになさってください。わたしたちは、主よ、あなたについていきます」。

[説教者：堀地正弘牧師]